

根拠のある考えをもち、説得力のある伝え方ができる児童の育成

～説明文・論説文における、教材・仲間・自分自身との対話を通して～

大城小学校

伊藤 美穂

1 はじめに

昨年度担任した6年生の児童は、本を読むことが好きな児童が多く、休み時間には、好きな本を紹介し合う姿がよく見られた。しかし、児童に尋ねてみたところ、説明文を読むことはあまり好きではないと感じていることがわかった。その理由を尋ねると、「筆者が何を言いたいかわからない。」「理解がしにくい。」という答えが返ってきた。児童は説明文を理解しなければならないとばかり考えていて、説明文を読むこと、知ること、考えることを楽しんでいないことがわかった。また、授業で自分の考えを伝えようとするときに、「はっきりしたことを伝えることは好き。」と思う一方で、「どう言えば納得してくれるかわからない。」「緊張する。」と思っていることがわかった。そこで、内容や組み立てを理解するだけでなく、わからないことや互いの考えを聴き合うことが楽しいと感じられるような授業をすれば、最後まで興味をもって説明文を読み、自分の考えをしっかりとって友達に伝えられるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 研究主題

根拠のある考えをもち、説得力のある伝え方ができる児童の育成 ～説明文・論説文における、教材・仲間・自分自身との対話を通して～

3 目指す児童の姿

- 筆者の考えや友達の考えと自分の考えを比べながら、興味をもって説明文や論説文を読むことができる児童。
- 友達との聴き合いの中で、教材文や資料・経験などをもとにした根拠のある考えをもつことができる児童。
- 資料や経験とつなげて、説得力のある考えを伝えることができる児童。

4 研究の仮説と手立て

(1) 研究の仮説

ア 仮説1

ペアやグループで互いの感じ方、疑問を聴き合う活動を大切にすることで、興味をもって内容を読み進めることができ、筆者の考えを理解すること、自分の考えをもつことにつ

ながるだろう。

イ 仮説 2

音読を効果的に取り入れることで、筆者の考えや伝え方の工夫をより深く理解し、言葉や表現にこだわった読み方、伝え方ができるようになるだろう。

ウ 仮説 3

内容の理解の手助けとなるような資料や教材文の内容と似たような自分の経験とつなげて考えさせることで、説得力のある伝え方ができるようになるだろう。

(2) 研究の手立て

ア 仮説 1 に対して 一 友達の考えに寄り添って聴き合わせる。

説明文や論説文を読んで感じたこと、疑問に思ったことをペアやグループで聴き合う活動を大切にしたい。自分の考えを話すことも大事にしたいが、まずは友達の考えを聴くことを大切にさせたい。「どう感じた？」と尋ねることから始めさせることで、「あなたの考えを聴くよ。」「友達は私の考えを聴いてくれる。」という気持ちで互いの考えを聴き合うことができるようにさせたい。また、「どこからそう考えた？」という尋ね方もさせたい。本文中のどの言葉からどのように感じ、考えたのかをはっきりさせることで、言葉を大切にしたい読みができるようになると思う。説明文や論説文は、児童にとって内容を理解することが難しい文もある。そのような時は、友達の「わからなさ」に寄り添い、児童の疑問を出発点とした学習活動を展開していきたい。児童の疑問を大切にしたい聴き合う活動は、「筆者は何を伝えたいのだろう。もっと詳しく読んでみたい。」「筆者の伝えたいことがわかった。」「友達の考えがわかった。」「自分はこう考えたって聴いてもらいたい。」こういったわくわくする気持ちで文を読み進めることにつながると考える。

イ 仮説 2 に対して 一 効果的に音読を取り入れる。

筆者の考えの読み取りや互いの考えの聴き合いの際には、適宜音読を取り入れる。音読をすることで、児童と教材がつながり、言葉や表現にこだわった伝え方ができるようになる。音読をさせる時は、「個人読み」「代表読み」「ペア読み」を児童の学習状態に合わせて使い分けていきたい。各々が音読をする「個人読み」では、じっくり読んで考えさせることができる。指名した児童に音読させる「代表読み」では、友達の音読を聴きながら何かに気づいたり感じたりすることができる。ペアで音読を聴き合う「ペア読み」も、「代表読み」と同様に友達の音読を聴きながら考えることができる。さらに、「ペア読み」をすることは、ペアのつながりをさらに深めると考える。また、音読を繰り返すことで筆者の伝え

方の工夫にも気づかせ、自分の考えを伝える際の参考にさせたい。

ウ 仮説3に対して 一自分の生活や経験とつなげて考えさせる。

教材を音読する中で、児童からは次々と疑問が出てくると思われる。そのような時は、自分の生活やこれまでの経験を思い出させるようにして、経験とつなげて考えさせるようにしたい。自分の経験を思い出させ、それとつなげて話をさせることは、内容を児童にとって身近なこととして捉え、筆者の伝えたいことをより深く理解することにつながる。その際には、「確かにそうだ。」と感じる児童もいれば、「いや、自分は違う。」と感じる児童もいると思われる。筆者の主張に納得するかしらないかは児童によるのだが、筆者が伝えていることを理解することで、それに対する自分の考えをもつことを大事にさせたい。自分の経験とつなげて話をする中で、伝えたいことに説得力を加えさせたい。

6 研究の実際

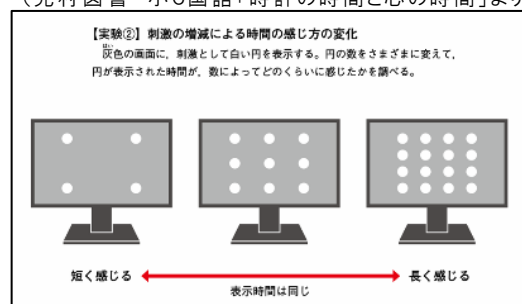
ここでは、3つの授業実践の事例を挙げ、その考察を行う。また、児童（C1：文章の読み取りが苦手。本文から離れて考えてしまう。）を抽出し、観察を行う。

（1）事例1 平成30年5月実施「時計の時間と心の時間」一川誠（光村図書小6国語）

ア 音読と聴き合いを繰り返して、筆者の主張を理解する。

本時では、第5段落を読んで、「心の時間」の進み方の特性について考えた。第5段落には、（資料1）の実験をした結果と筆者の考察が書かれている。「心の時間の進み方は、どうしてちがってくるか考える。」というめあてを確認し、児童に音読（個人読み）をさせ、ペア・グループで感じたことを聴

（資料1）「心の時間」の進み方についての実験
（光村図書 小6国語「時計の時間と心の時間」より）



き合わせた。グループでは、児童はそれぞれ疑問に思うことや自分の感じ方を聴き合った。

（資料2）「時計の時間と心の時間」グループでの聴き合い

- C1 刺激って何？
- C2 刺激っていうか、見られてると、短く感じるじゃん。あと、夢中になると、短く感じるよね。
- C3 丸が4つあると、長く感じる。見る場所がないから。
- C1 だけど、刺激って何？刺激って目からの刺激？

その後、学級全体での聴き合う活動で、C1はみんなに（資料2）下線部の疑問を投げかけた。それに対し、C4が『例えば』って書いてあるけど・・・と話し始めたのでその部分を各自に音読させることにした。本文には、次のように書かれている。①「例えば、ものが少ない部屋よりもたくさんある部屋のほうが、身の回りから受ける刺激が多いので、時間の進み方がおそく感じるのではないかと考えられます。」

（資料3）「時計の時間と心の時間」音読後の全体での聴き合い①

- C2 班で言ってたんだけど、筆者と違って、友達の部屋に行って、部屋にものが少ないと見る場所がないから長く感じるけど、多いといろいろ見るから短く感じます。

- C 5 私はC 2とは違って、たくさんあると数えるから、多ければ多いほど数えるところが多いから、物が多いと確認の時間、考える時間が長く感じる。
- C 6 ぼくはC 2と同じで、筆者は多いと長く感じるって書いてるけど、ぼくは違う。物が少ないと見慣れるからひまになって、長く感じる。
- C 4 (1)「考えられます」って書いてあるから、気持ち次第なんじゃない。
- C 1 そうということね。(2)前は気持ちで、今日は、物があるかないかね。

音読（個人読み）後、グループ・学級全体で互いに感じたこと、考えたことを聴き合わせた。この前の段落で、「その人がそのときに行っていることをどう感じているかによって、進み方が変わる。」という筆者の主張を読んでいる。C 1は、C 4の（資料3）下線部（1）の発言を受けてそのとき読み取ったことを思い出し、（資料3）下線部（2）のように発言している。C 1は、授業後も、「前の時は、楽しいときは短く感じて、楽しくないと長く感じてって書いてあって、今日は、周りに物が少ないと長く感じて、多いと短く感じてってということね。そういうことか。」とつぶやいていた。

イ 経験や具体例を挙げて、自分の考えを伝える。

筆者の主張を理解したところで、児童が自分の考えをもつために、もう一度音読（個人読み）をさせた。筆者が下線部①のように例を挙げて説明していることから、児童が、自分の経験とつなぎながら時間経過の感じ方の違いについて話し始めた。

（資料4）「時計の時間と心の時間」全体での聴き合い②

- C 7 例えば、真っ白な何もない部屋に閉じ込められたとすると、どこに何があるかわかんなくて、情報がないからわかんないから、何かあるかなって考えていると短く感じる。
- C 3 さっきC 2が言っていたけど、たくさんあると見るのに夢中になるから、私は夢中になると短く感じます。
- C 8 教室だと見慣れたものがあるし、何があるかわかるし、時計とかいろいろあって、自分にとっては刺激が多い方が長く感じる。
- C 9 テレビでニュースを見てるとつまらなくて、刺激が少ないから長く感じる。でも、ゲームやっていると、私には刺激が多いから短く感じる。Oとか物とじゃなくて、何があるかによる。
- C 10 たしかに。
- C 11 何が楽しいと思うか、気持ち次第で変わってくると思う。

筆者の主張を受けて、それに納得するかしらないかは児童による。筆者の主張がすべて正しいとしてその方向に向かおうとするのではなく、様々な経験や具体例を挙げてそれぞれの児童が自分の考えを伝えることができた。

ウ 児童の「ふり返し」から

（資料5）「時計の時間と心の時間」児童のふり返し

- ・ 私ははじめ、筆者が何を言っているのかわかりませんでした。だけどわかって、心の時間は気持ち次第で変わって、環境にも関係あるってわかりました。（C 1）
- ・ 例を使って考えを説明してわかった。
- ・ 筆者が言っている、身の回りから受ける刺激の多さで変わるだけでなく、見ているものに興味があるか、集中しているかによっても変わると思いました。
- ・ 集中するかしらないかは人それぞれだから、やっぱり気持ち次第だと思いました。
- ・ 物が少なくても多くても自分が夢中になれる物があったら時間が経つのが早く、気持ちの問題だと思った。

今回は、C 1の疑問から児童の学びが展開された。グループという少人数だからこそ、ちょっとした疑問でも出すことができた。そして、そこでグループの友達が考えてくれたからこそ、クラス全体にも疑問を投げかけて聴いてみたくなった。C 1は、授業後の「ふ

り返り」で、(資料5) 下線部のように書いている。「刺激」という言葉の意味についてはっきりわかったわけではない。しかし、筆者や友達が例を挙げて説明したことで、「身の回りの環境によっても、『心の時間』の進み方は変わります。」という筆者の伝えたいことは、理解できたようである。また、音読を繰り返すことで、筆者の伝え方の工夫（例を挙げるとわかりやすい）にも気づくことができ、多くの児童が例を挙げて考えを述べることもできた。その中で、(資料4) C 9の発言、それを受けて考えを述べたC 1 1の発言に納得し、自分の考えをもつことができた児童が多かったようである。

エ 本時の考察

児童にとって難しい内容の論説文だったため、初めの感想では筆者の主張を理解できていない児童が多かった。音読の回数を増やし、互いの考えをしっかりと聴き合う活動を充実させたことは、児童の理解を促し自分の考えをもつことにつながった。また、具体例を挙げて自分の考えを伝えようとする姿勢をもたせることにもつながった。

(2) 事例2 平成30年11月実施『鳥獣戯画』を読む 高畑勲(光村図書小6国語)

ア 経験をもとに、互いの見方・感じ方を聴き合う。

まず、第1段落を音読（ペア読み）させた。第1段落は、実況中継のように絵の中の様子が書かれている。ペア読みは、友達の音読に耳を傾けながらじつくりと『鳥獣戯画』（資料6）を見て、『鳥獣戯画』の世界にどっぷりと浸からせることを目的とした。その後、本時は、『鳥獣戯画』（資料6）を見て、兎や蛙の気分を聴き合うことをめあてとすることを確認し、それぞれの動物がどんな声を出しているのかを考えさせた。形、大きさ、線の太さ、表情、格好などから想像させ、どこに着目したのか、どういう理由でそう感じたのか、根拠も伝えるよう確認した。

(資料6)『鳥獣戯画』(光村図書 小6国語『鳥獣戯画』を読む)より



(資料7)『鳥獣戯画』を読む 全体での聴き合い①

本文（筆者の見方）はまだ読んでいない。

C 1 蛙が反則してて、「反則技はずるいぞ。正々堂々と戦え。」って兎は言ってる。

C 1 2 手前の真ん中にある兎（A）は、怒ってる感じがしないから、「大丈夫？」みたいなことを言ってる感じがする。

T (1) みんなは右の兎（A・B）はどんな顔してると思う？

～ペアで聴き合う～

C 1 3 どっちも笑ってて、(2) 特に目を細めている兎は大笑いしてると思う。

C 1 4 (3) 一番右の兎（A）の耳が立ってて、犬も起こると耳が立つから、この兎は怒ってて、真ん中の兎の耳は立ってないから怒ってなくて、「がんばれー。」って応援している。

C 1 5 一番右の兎（A）、怒ってる感じの顔してる。

C 1 6 左の蛙（C）、ぼくが思うことは、「やった、兎を倒したぞ。でも、投げ飛ばされた兎とぶつかって痛いな。」って、笑ってるけど痛がっている様子もある。
 C 1 2 兎が弱いみたいな感じで笑っているような感じもする。
 C 1 3 うしろ見てて、兎見てない蛙（C）がいる。
 C 1 5 地面に手ついて笑ってる。（4）大袈裟に笑うとき、手をたたく。大袈裟なんだよ。
 T （5）みんなはこの蛙（C）についてどう思う？
 ～ペアで聴き合う～（C 1 7 が狂言の話をしている。）
 T C 1 7 は、どう感じる？
 C 1 7 これは大昔の絵だから、（6）狂言みたいに大袈裟にやっていると。笑ってる。
 C 1 8 これは、絵だから、見てる人にわかりやすいように、でっかく描いてる。

（資料 7）下線部（1）（5）のように、どの動物に着目するのかを具体的に示すことで、児童はその動物をよりじっくり見て、目や耳、表情や動きに着目して聴き合うことができた。また、（資料 7）下線部（2）（3）（4）のように、自分の普段の行いや、家で飼っている犬の様子を思い出し、自分の見方を伝えることができた。（資料 7）下線部（6）の児童の発言では、たくさんの児童が「たしかに。」「そういえばそうだ。」などと反応した。この授業の 1 か月前に、児童は修学旅行に行き、そこで狂言を鑑賞している。その時に狂言師さんが腹を抱えて床をたたきながら大袈裟に笑っていた様子を思い出し、蛙の様子とつなげて自分の見方を伝えることができた。

イ 音読を繰り返し、筆者の見方・感じ方を聴き合う。

次に、本文第 5・6・7 段落を音読（個人読み）し、筆者の見方・感じ方を確かめることにした。筆者はどこに着目し、どう考えたか、自分と似ているか、違っているか、ということペア・グループで聴き合わせた後、全体で聴き合わせた。

（資料 8）『鳥獣戯画』を読む 全体での聴き合い②

C 1 8 蛙が、秋だから、寒い時白い息が出るから、それじゃないかなって思った。{蛙から出ている線（D）について述べている。}
 T 第 5 段落の初めから 6 行読んでみよう。
 ～第 5 段落ははじめから 6 行音読（ペア読み）の後、ペアで聴き合う（線について）～
 C 1 6 白い息だともわっと出るから、これはやっぱり「よーし」とかの声の表れだと思う。
 C 1 3 投げ飛ばしたときの「やった」という感じで息を吐いた。
 C 1 9 相撲が長いから、疲れて息を吐いてる。
 C 2 0 2 枚（右の相撲と左の相撲）の間は描かれてないけど、C 1 9 が言ってたように、ずっと戦っていて、激しく動いていたから、最後疲れて息が出て、と思いました。
 C 2 1 疲れて息が出て、絵だとわかりづらいから、大袈裟に表現している。

音読したことで、これまで誰も着目しなかった線（D）について、筆者の見方を知り、じっくり考えることにつながった。しかし、児童は絵から感じることばかり話していて、本文から離れてしまっている。筆者は本文の中で、「けむりかな、それとも息かな。ポーズだけでなく、目と口の描き方で、蛙の絵には、投げ飛ばしたとたんの激しい気合いがこもっていることがわかるね。そう、きっとこれは、『ええい！』とか、『ゲロロッ』とか、気合いの声なのではないか。」と、自分の見解を述べている。この部分を再度音読させると、筆者の着目点や感じ方を自分の感じ方と比べて考えさせることができたと思われる。

ウ 筆者が投げかけた疑問について、みんなで聴き合う。

C 1 が、第 6 段落に書かれている「なぜ、兎たちはわらっていたのだろうか。」という筆

者の疑問に着目し、「兎と蛙は仲が悪くてけんかしているみたいだけど。」とつぶやいたの
で、第6段落を音読（個人読み）させた後、互いの考えを聴き合わせた。

（資料9）『鳥獣戯画』を読む」全体での聴き合い③

- C22 この絵を見ると、蛙は息を出すくらい真剣に戦っているけど、兎は笑っているから、蛙だけ本気にな
って、兎は遊びのつもりでやっている。
C12 2人とも真剣勝負でやってる。蛙が真剣勝負じゃないとしたら、まず耳をかむ必要がないし、あと、
笑っているようには見えない。
C23 普通の日常だと思います。もしも真剣で、兎の耳を噛んでは、兎にとがめられる。
C1 C23の言ったことはわかるけど、真剣勝負だと思う。

これまで、本文からどんどん離れていき、自由に想像を膨らませて話をする傾向が強か
ったC1だが、本文をよく読むようになり、筆者の疑問が書かれた部分によく着目して考
えを述べるようになってきた。もう一度本文を音読させて考えさせることで、絵に表現さ
れている細かな部分にも着目できた。

エ 児童の「ふり返し」から

（資料10）『鳥獣戯画』を読む」児童のふり返し

- ・ （1）蛙の気合いの息が出ているから、真剣勝負だと思いました。（C1）
- ・ 蛙の口から出ている線は、気合いの表れだと思いました。筆の使い方で勢いを表現していると思いました。
- ・ （2）今のアニメは音や動きがあるけど、この絵は音もなく絵しかないのにおもしろくて、C20が言っ
たように絵の間に想像できて、動いているように感じました。

C1は、（資料10）下線部（1）のように、はじめは意識していなかった細かな線やそ
の太さ、勢いにも着目し、面白さを見つけ出すことができたことがわかる。また、（資料1
0）下線部（2）のように、この絵から動きを感じ、アニメーションを思い浮かべる児童
もいた。筆者は『鳥獣戯画』は、「アニメの祖でもあるのだ」と述べている。

オ 本時の考察

ペアやグループでの聴き合いを何度も取り入れたことで、全体で自分の考えを発言でき
る児童が増えた。全体での聴き合いでは、着目点や理由を明らかにし、筆者の感じ方にと
られることなく自分の考えをもち、伝えることができた。ただ、筆者の表現の上手さを
味わわせるためにも、筆者の見方が書かれた部分をもっと音読させるとよかった。

（3）事例3 平成31年1月実施「自然に学ぶ暮らし」石田秀輝（光村図書小6国語）

ア グループで疑問を聴き合い、資料を使って調べる。

本時は、第7段落を読んで、生き物の「泡」の使い方からどんなことが学べるか聴き合
うことをめあてとした。第7段落には、「アワフキムシ」や「ベタ」が泡の性質をうまく利
用して暮らしていることと、その性質を
利用した新しい暮らし方についての筆者
の提案が書かれている。「泡ってどんなと
ころがすごいのかな。」と児童に問いか

（資料11）「自然に学ぶ暮らし」グループの聴き合い①

- C24 泡の性質は、2つ。
C1 （1）泡の性質って、何に役立つの？
C25 くっつく。
C26 汚れを取る。
C24 あと、温める。
C1 何に役立つの？
C26 （2）泡ってつぶれちゃうよね。

け、音読（代表読み）をさせた後、それぞれの考えをペア・グループで聴き合わせた。

本文に書いてある、「空気の層によって熱をにがさない」「表面が縮もうとする」という泡の2つの性質はグループの中で確認できたが、C 1は（資料1 1）下線部（1）の疑問を友達に何度も投げかけている。また、C 2 6も（資料1 1）下線部（2）のように疑問を抱いている。各グループで聴き合う様子から、児童が「アワフキムシ」についてもっと詳しく知りたがっていると感じられたので、図鑑やインターネットで調べさせることにした。児童は様々な資料から、「アワフキムシの泡の成分は、石鹼に似ていてつぶれにくいこと。」「アワフキムシの幼虫は、泡の中で植物の茎や枝に針を刺し、栄養を吸って成長すること。」を知ることができた。

（資料1 2）「自然に学ぶ暮らし」グループでの聴き合い②

- C 1 (1)「つばのような白い泡」って書いてあるから、ねばねばしてるからつぶれないんだ。
C 2 5 石鹼に似ているから崩れにくくて、外敵と乾燥から身を守っている。
C 2 6 でも、泡の中で息ができない。
C 1 針を刺して吸って書いてある。

C 1は、グループのC 2 6の（資料1 1）下線部（2）疑問を受けて資料を読み込み、（資料1 2）下線部（1）を見つけ出すことができた。さらに、「泡の中で息ができない。」というC 2 6の新たな疑問についても意欲的に調べ、「針を刺して栄養を吸っている。」ことを知ることができた。

イ 音読をして筆者の伝えたいことを確かめ、自分の考えをもつ。

「アワフキムシ」について理解を深めたところで、本文をもう一度読み、「アワフキムシ」から学べることや筆者の考えを確かめることにした。第7段落後半には、泡の性質を利用したお風呂の開発について書かれている。このお風呂は、使う水の量が少なくて済む。音読（個人読み）をさせてグループで聴き合わせたところ、泡のお風呂には課題もあるということについて話をしているグループが多いようであった。自分がお風呂で体を洗うことについて思い出させながら、聴き合わせた。

（資料1 3）「自然に学ぶ暮らし」全体の聴き合い

- C 2 7 泡はつぶれるでしょ。
C 2 8 体を洗うと泡は汚れる。
C 2 9 あとで水で流してしまう。
C 2 5 夜遅くにお父さんがお風呂に入るけど、遅いから泡はなくなる。
～もう一度第7段落を音読（代表読み）し、虫から学べることを確かめる～
C 3 0 (1) 虫の図鑑でも見たみたいに、つぶれにくい泡を作りたい。虫から学べる。
C 3 1 (2) お風呂ってふつうどのくらい水使うの？
～インターネットで調べる～
C 3 2 ふふうのお風呂だと200から300リットルが、（泡のお風呂だと）3リットルですむ。（本文に3リットルと書いてある。）
C 3 3 課題はいっぱいあるけど、節水できる。

はじめは、自分が思い浮かべる泡の性質や、自分で泡風呂を作ってみようとしたことのある児童の話から、泡のお風呂の問題点ばかりが出てきたが、音読をさせることで、（資料1 3）下線部（1）のように、筆者の伝えたい泡を利用してうまく生きている虫のすごさ

にも着目できた。また、(資料13) 下線部(2)のように新たな疑問も出てきたことで、泡のお風呂の節水力にも気づくことができた。

ウ 児童の「ふり返り」から

(資料14)「自然に学ぶ暮らし」児童のふり返り

- ・ 泡の性質は自然にとっても活やくしているとわかって、暮らしにも活やくするかもしれないとわかりました。
(C1)
- ・ 泡のお風呂は、あたたかい泡で体をあたためてくれる一方、泡がつぶれてしまうというデメリットがあるとわかりました。
- ・ 泡を使えば、お風呂の水も減らすことができるから、泡はすごいと思いました。

(資料14) 下線部のように、C1は、資料を通して「アワフキムシ」の泡の性質を知ることができ、それを暮らしに生かしていくことができないかと言う筆者の主張を理解することができた。児童は、泡の性質や筆者が提案する新しい暮らし方(泡のお風呂)についての利点・問題点についてわかったようだ。

エ 本時の考察

グループの聴き合いでたくさんの疑問が出され、それについて調べたいという思いから、興味をもって資料で調べることができた。C1は、本文を読んで自ら疑問点を見出す力、それを調べて解決する力が身についてきた。「資料が見たい。もっと資料がほしい。」と意欲的に資料を求めることができた。筆者は、「自然に学び、新しい暮らしの在り方を考えていくこと。」を提案している。泡の性質を生かした新しい暮らし方について、児童のアイデアを聴き合わせたかったが、それは難しかった。

7 研究の成果

ア 「友達の考えに寄り添って聴き合わせる」について

1年間、国語に限らず様々な場面で、ペア・グループで聴き合う活動を行ってきた。教師が指示をするのではなく、自分たちで聴きたいと思うときに聴くということ大切にしてきた。説明文や論説文の授業では、文を読み、「難しい。」「わからない。」と困っている様子のペアでも、「どう感じた?」と聴くことから始めさせることで、互いに感じたことを話し始めることができた。相手の考えを聴くことで自分の中に新しい考えが芽生え、それを相手に伝えることで児童の学びは少しずつ深まっていった。どんなことでも聴いてくれる友達がいるから、どんなことでも話してみようという児童が増え、「わからない」から始まる学びを楽しめるようになったと感じる。C1は、ペアやグループの友達がどんな疑問でも聴いてくれて一緒に考えてくれたからこそ、全体の間でも疑問を投げかけることができ、それをみんなで考える楽しさ、わかる喜びを感じることができた。聴くことから始める学びは、有効であったと言える。

イ 「効果的に音読を取り入れる」について

説明文・論説文の授業では、児童が文から離れることも多く、そのたびに音読をさせた。時には、音読ばかりで終わってしまうこともあるほど、たくさん音読をさせた。音読をすることで、児童は教材文と深くつながることができた。音読を苦手としていたC1も、何度も音読をすることで教材文にどんなことが書かれているか読めるようになった。そして、友達の音読を聴くことで自分の考えを少しでも深めようとする姿勢が見られるようになった。また、文から離れて話す傾向があったC1が、文中の言葉から気づいたことや疑問に思うことを話せるようになっていった。児童によっては、読むことで精一杯になってしまいうことも考えられる。C1のような児童にとっては、「代表読み」が有効であった。

ウ 「自分の生活や経験とつなげて考えさせる」について

今回の実践では、自分の生活や経験を思い出させたり、具体例を挙げて説明させたりすることで、児童が「なるほど。」「自分は違う。聴いてほしい。」といった反応を示し、生き生きと互いの考えを聴き合うことができた。自分にとって身近なこととつなげて考えることで、自分の考えがわかりやすくなり説得力が増すことや、聴き手である友達の反応も生き生きとしてくるという経験ができた。身近なこととつなげるだけでなく資料とつなげることも、わかりやすさや説得力を増すという点で有効であった。今回は、**実践3**で様々な資料で調べさせた。C1は、新たな資料を提示することでわくわくした気持ちを持ち続けることができた。

8 おわりに

最後までわくわくした気持ちで説明文・論説文を読んでほしいと願い、研究を進めてきた。児童はまだ、説明文・論説文は難しいと感じているものの、自分の疑問や考えを積極的に友達に伝えようとする児童が増えた。説明文や論説文の筆者は、内容について知ってほしい、考えてほしいと強く願ってその文章を書いている。私たち教師は、児童にどのように読み取らせるか、どんな発問をするか、といった授業の流れを一生懸命に考えるが、それよりもまずは、児童には、知ること、考えることの面白さを感じてもらいたい。そのためにも、教師自身がその教材を読み、調べ、知ること、考えることをとことん楽しみたい。そうすることで、教材を読んで児童がどんなことに気づいたり引っかけたりしているのかが見えるようになり、児童と教材、児童と児童をうまくつなぐことができるようになっていくのではないかなと思う。今後も教材を研究することを楽しみ、児童と教材、児童と仲間、児童と自分自身との対話を聴くことを楽しみたい。